
mustLIVE -**何があっても、絶対に-**

又里ゆたり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u s t L I V E - 何があっても、絶対に -

【Nコード】

N 3 7 4 2 B A

【作者名】

叉里ゆたり

【あらすじ】

『今』を平和に過ごしている主人公・杜野 遊里。

しかし、彼は誰にも話せない秘密を隠し持っていた。

学校で「いじめ」に逢っている紅髪の少女・五十嵐 弥凧との出逢いが、そして秘密が暴かれた瞬間が、彼の世界を変えていく。

注意：過去に他サイト等で投稿した小説にて、登場人物の名前が一部被っております。ご容赦ください。

人気者⇄嫌われ者

部活で良い汗をかいて、帰ろうとしたら教室に明日締め切りの課題を忘れた。

俺は数学の成績が悪い。今まで課題提出で辛うじて単位を稼いでいたようなものだ。

早くしないと学校が閉まってしまう。本来なら生徒は帰らなければいけない時間。急ぎつつも大嫌いな数学の為にしぶしぶ4階の教室へと足を運んだ。

息を切らして着いた教室。クラスメイトの机の置き勉強が目立つ。そんな事より、早く課題を持って帰らなければ。あーあ、数学なんて社会に出て役に立つのかよ。

コツ、コツ。

「…?」

これは誰かの足音。先生だったらまずい。ばれないようにそっと教室のドアを開けてみた。

そこで、俺は全てを奪われる感覚を味わった。

目の前の、綺麗な紅の髪をした謎の少女に。

M U S T L I V E - 何があっても、絶対に -

ピンポンパンポーン、と学内放送のチャイムが鳴る。

『体育科2年、杜野^{もりの}。至急数学担当の佐藤のところまで！。』

「げっ、まじかよ…あれでも出来るところはやったのに…」

「遊里^{ゆじり}、お前の数学はやったのに入らねえって。素直に誰かのをカニンングすれば良かったのによお。」

「残念、俺はお前とは違って基本のルールは突き通してるんでね。」

「お前…そういうところはしっかりしてんのな…」

俺は、杜野^{もりの}遊里^{ゆうり}。高校2年の16歳。生粋の体育会系男子だ。

昔、名前と見た目からよく女の子と間違われた。

恥ずかしい話だがファーストキスが4歳。しかも相手は男で、無理矢理キスされたいう最低な思い出がある。

体育会系なだけあってある程度は体格に救われているが、昔の名残なのが見る人によっては高校生になった今も女に見えなくもないと言われることもしばしば。

俺はゲイでも女でもない。普通に好みは女の子。健全な男だったの。

先程呼び出しをくらった原因の数学は、入学以降学年最下位の座を守り続けている。

だがその分陸上ではそれなりの成績を収めている。

気がつけば地元では有名になっていたらしく、知らない女の子の集団にストーカーされていたなんて事も。

幸いな事に、最近よく話題になっているいじめなどの経験は無い。

さっきの奴みたいにオープンな会話が出来る友達が沢山いる。『今は、表向きは幸せだ。』

でも、俺には誰にも言えない隠し事がある。
この隠し事がばれたら、きっと俺は…

今まで築いた『全て』を失う事になる。

「よお、『リストバンド風雲児』！今日も絶好調だな！」

部活中に時々突然現れる、背の高い金髪の先輩。名字は…なんか2つの単語を掛け合わせた感じの人。

俺の耳元で部活仲間の先輩が喋る。

「また来たよ、駒木川^{こまきがわ}。あいつに捕まると厄介だから、あっち行こうぜ。」

先輩に言われるがままに、こまみがわさん（だっけか？）から離れる俺達。

すると、彼（既に名字を忘れた）は不機嫌そうに近くに捨ててあった空き缶を蹴って、グラウンドから去って行った。

「うっわー、危なかったな。あいつ、最近杜野に目をつけてる感じだから気をつけろよ。」

「……」

「いつその事、いつも左腕に着けてるリストバンドはずしちゃえば

「？」

……それは、絶対に出来ない。絶対に。

俺は、あの先輩が来るたびに疑問に思う事がある。

さっきあの先輩が言っていた『リストバンド風雲児』っていうのは、テレビ中継があった時に、地元の某ローカル番組が勝手に付けた俺のキャッチフレーズだ。つまり、そのローカル番組を見ている人にしか分からない呼び名だ。

俺が陸上競技で有名になってから、あの先輩は頻繁にやってくるようになった。

きっと、あの先輩も陸上に興味があるのだろう。初めてキャッチフレーズで呼ばれた時、俺の活躍を見てくれていたんだと、正直嬉しかった。是非とも話してみたいと思った。

でも何故か、周りがそれを許してくれない。

「あの、先輩！ひとつ聞きたいのですが…」

「なんだ？杜野が質問なんて珍しいな。」

「どうして、さっき来た先輩が危険なんですか？」

「さっき来た先輩…ああ、駒木川ね！」

先輩は、重い話題にも関わらず、何処となく楽しそうに話を進めた。

「あいつ、1年の時に女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。マジで常識無い奴だよな！」

血濡れ貞子と偽りの人気者

昼休み。俺は席でひとり、もやもやしていた。

『女の子相手に暴力事件起こしたんだぜ。』

『マジで常識無い奴だよな!』

「おい、遊里!」

「……………」

「遊里!おーい!」

パン!と手を叩く音。

「…何?」

友人は息を切らして興奮している。なんなんだ。

「俺さあ、遂にこの目で見ちまったよ！血濡れ貞子！」

『血濡れ貞子』は、話を聞く限り、他のクラスにいる幽霊らしい。俺達が所属する体育科は、他のクラスと校舎が離れているから、滅多に別のクラスに行く機会などない。

そもそも俺は幽霊の類などは信じないタイプ。だから今までの友人の話はスルーしてきたが、実際に見たというのなら話は別になってくる。

「へえ…本当に幽霊っているのか？」

「本当にいたんだって！血濡れ貞子！ほら来た来た！」

幽霊が来たなんて、普通は大惨事。そんな事にも関わらず、楽しそうに教室のドアを覗く友人。

クラス内で話題になっっているらしく、女子が集団で「お化けだ！」

「マジ怖ーい！」と話のネタにしている様子。

幽霊ってそんな簡単に見えるもんか？

友人の後ろから、俺も初めて血濡れ貞子をこの目で拝む事になる。

(嘘だろ…？)

彼女を見るのは、初めてじゃない。

風に揺れる紅い艶のある長髪。

「きゃー！」

「本物の血濡れ貞子だああ！早く隠れないと殺されちゃうかも！」

間違いない。数学の課題を取りに行った時にすれ違った、綺麗な紅い髪が印象的な、あの少女だ。

この時、俺は初めて『血濡れ貞子』の真実を知った。そして、誰にでも分かる一つの答えに辿り着いた。

放課後。「数学の補習がある」とそれらしい理由で、初めて部活をさぼった。

部活をさぼってでも、どうしても知りたい事があった。

時間は午後6時。この時間は部活動のグラウンド使用のみが許可されていて、数学の課題を取りにいった時と同様に生徒が入るのは特

別な理由が無い限り許可されていない。

勿論数学の補習なんて真っ赤な嘘。本来の目的はまた別だ。

……コツ、コツ。

来た！この音だ！俺は勢い良くドアを開けた。

教室からすぐ見える距離にいた、紅い髪の少女。

少女は俺に気付くと、こちらに鋭い視線を向けてきた。不思議な事に、怖さを感じない。

「びっくりさせてごめん。聞きたい事があるんだ。」

「……………杜野…遊里か。」

初めて聞いた少女の声は、綺麗な髪に劣らず、透き通った声だった。

「あの…嫌かもしれないけど、血濡れ貞子って…」

少女は一言、

「昼休みに知った筈だ、私の事だと。」

「どうして、みんなは君にあんな酷い事を言っただ？ どう考えてもいじめだろ、あれは。」

素直な疑問をぶつけると、少女は一瞬驚いた表情を見せた。本当に、一瞬だったか。

「……お前は、私が怖くないのか？」

「いや、全然。」

「……変わった奴だな。」

なんだって？ 俺は（秘密にしている事を抜かせば）そんなに変わった事はしていない。

どっちかと言えば、変わっているのはそっちの方だ。女の子なのに、まるでアニメや映画でかっこいいタイプの女性みたいな話し方をしている。

「髪、だ。」

「……え？」

「私は生まれつきで、この通り血のような紅色の髪。両親は、気味悪がって私を捨てた。」

「……！」

ひどい。ひどすぎる。こんな事が現実にあっているのか？

声を掛けたくても、言葉が出ない。何と云えばいいのかわからない。

「同じ赤毛でも、何処かの物語のような魅力も、明るさも、仲間も、未来も私には無い。」

「そんな……」

身動きを取る事が出来ない俺に、少女は言い放った。

「もっとも、平和に暮らしてきたお前には、分からないだろうがな。」

「

『平和』？

そんなの、俺にとっても今だけのもの。

俺にだって、誰にも言っではいけない秘密があるんだ。

「分かったよ。君には見せてあげるよ。」

無意識に口に出した言葉と、左腕のリストバンドに向かって伸びる自分の右手。

この校舎には、俺と少女しか残っていない。

だから、この事実を新たに知るのには、少女ひとりだけ。

リストバンドの下の皮膚には、血よりも赤い、所謂原色の赤を背景に、紫色の斑点が今も動き回っては混ざり合っ……決して人にあるってはないもの。

リストバンドの下に隠れるものを見て、無表情を貫いていた少女も目を見開いている。

「ほら、気持ち悪いだろ？これをみんなに知られたら、俺も終わるだ。」

そこで少女が、思わぬ一言。

「痛くないのか？」

ためらい無く、見るだけでおぞましい左腕に両手で触れた少女。

次は俺が戸惑う。なんで、何で逃げない。

「どうしてだよ…これを見ても、気持ち悪いって、怖いって思わないのかよ？」

「全然だな。それより、私の質問に答える。」

いつの間にか、立場が逆転している。何だこれ。

「まあね。常に痛いよ。中学の時に事故に逢って、それからこいつが出来たんだ。誰にも知られたくなくて、リストバンドですつと隠してたんだ。」

でも、今、この場で不思議な事が起きている。

少女が左腕に触れてから、常に感じていた鈍い痛みが治まっているのだ。

「そうか…それを、私なんかに見せて良かったのか？」

「ははは、何で見たんだろうな。自分でもわからないや。」

俺は、薄々感じていた。

この人なら、全てをさらけ出せると。

「五十嵐 弥凧…」
いがらし みなぎ

「…ん？」

「私の名前だ。私だけ一方的にお前の名前を知ってても意味が無いだろう。」

「ありがと。よろしくな、弥凧！」

「早々下の名前で呼ぶのか…」

「それと、俺の名前は『お前』じゃないぜ。名前、知ってるんだか

ら気軽に呼んでくれよな。」

「…分かった。」

俺・杜野 遊里と、

紅髪の少女・五十嵐 弥凧の出会い。

すべては、ここから始まった。

印象に捕われるな。

「よっ、弥風！おまたせー。」

「別に…待ってはいないが。」

あれから、部活終わりの校舎で弥風と話す事が日課になった。

誰もいない校舎。まるでいけない事をしているどっかのカップルみたいだ。（実際いけない事だが。）

「そういえば、弥風って何処のクラスなんだ？」

「…家政科だ。」

これは意外。てっきりエリート系の学科（実際にそんな感じの特別な科がある）だと思った。

「おっ、料理とか出来るのか？今度俺に作ってくれよ！」

「…機会があつたらな。」

あれ？てつきり断られるかと思つたら案外ノリが良いな。そんな事本人に言ったら怒られそうだが。

「なあ、弥風。どうして毎日ここにいるんだ？」

「……………」

黙り込む弥風。流石にこれは言えないってことか。

わざわざ家政科の校舎から離れた体育科の方に来るほどなんだから、それなりの理由があるのだろうけれど。

「…いつか、わかる時が来る。」

何なんだろうか、一体。

どうにか人の目をかいくぐって、無事学校から脱出成功！

…かと思われたが、今日はそうもいかなかったようだ。

「よっ、張り込んでた甲斐があつたぜ、『リストバンド風雲児』！」

部活の時に、幾度も顔を出して来たあの金髪先輩だ。張り込み
って事は、俺を待ってたってことか…

「あ、どうも。」

「お？今日は逃げないのか？」

「…勝手に部活の先輩が逃がしてるだけですよ。」

「ああ、奴ね。あいつ表向きだけ良い顔してうざったらしいんだよな。」

実際、否定はできない。いつも先輩から俺を遠ざけようとする部活仲間の先輩は、爽やか系に見せかけて、実は相当な腹黒だと俺も踏んでいる。

表向きだけ良い顔って言うたら、自分もそうなんだけど……

「俺は駒木川 恒哉こまきがわ じゆんざってんだ。名字が難しい分、下の名前が単純でいいだろ？」

「杜野です。杜野 遊里といます。」

「へえ、あれでユウリって読むのか！」

「他になんて読むんですか。」

「ユリ、とか？」

「…よく言われます。」

「普通に遊里って呼ぶわ。ところで…」

先輩は表情をにやつかせて、俺の顔をのぞいてくる。なんだなんだ。

「遊里さ、最近あの美人な女の子と仲良いみたいじゃないの。」

「げっ、もしかして…いや、クラスの女子と交流はあるし、そのまま思った事を素直に言ったら墓穴を掘るだけだ。」

「…家政科の弥風ちゃんだったっけかなー。」

「えっ、あっ………」

「よっしゃ、凶星ってやつか？」

最悪だ。悔しいけど大正解。

俺が弥風と話していたのを見られてたのか。これはかなりまずいんじゃないか。

「あの子、前に体育科の方に来て大騒ぎになったらしいな。」

その後かは知らないけど、弥風ちゃんが屋上の隅っこで、ひとりで泣いてたぜ。」

「え………」

言う方は簡単、言われる方は傷つく。

それはポーカーフェイスの弥風だって一緒だ。弥風だって、一人の『人間』なんだ。

「屋上は全部俺の縄張りだからな。一回だけじゃねえ。弥風ちゃんは気づかれてないと思ってるだろうけど、何度も屋上に泣きに来てるぜ。」

前、思い切って声をかけたら凄惨な形相で睨んできて、どっかに逃げてったけど。」

だからさ、遊里が元気づけてやれよ。だつてさ。

弥風の心の傷は、完全に癒えることなんてないだろうに。

「恒哉先輩、なんで弥風の名前まで知ってるんですか？」

「あれ？そっか、言ってなかったな。」

俺も家政科だぜ。つまりは同じ学科の先輩だし、毎日弥風ちゃんを見てるって事！

ま、毎日全校舎を見回りしてる俺様なら、お前らのリア充っぷりもお見通ししてことよー！」

急展開・超展開

「遊里！明日、大会らしいな！」

「…はい、頑張ってます。」

「よし、俺は屋上から念を送ってるぜ。頑張れよ風雲児！」

恒哉先輩の愛（？）がこもった拳が胸に当たる。痛い…

この時、大会でこれまでにない大変な事が起きるなど誰が予想した
だろうか。

俺は長距離走の種目に出ている。

どこでスパートをかけるかが勝負の分かれ目。

集中力を研ぎ澄ませ。目の前を走る事だけ考える。

『決勝進出の選手は準備をお願い致します。』

『位置について、用意！』

バンっ！！という音と同時に自分のペースで駆け出す。

競技が終盤に近づいた時、事件は起きた。

スパートをかけ、一気に群を追い抜こうとした時だった。

前についていた選手が、突然転倒。

俺もそいつに巻き込まれて、同時に転倒した。

ただ転んだだけなら問題無い。

むしろ重大なのは、転んだことじゃない。

「……!!!」

転倒で滑ったことによって、今まで秘密の隠し役をリストバンドが、肘のあたりまでずれていた。

地元のテレビ局も来ている中、あの見られては行けないものを、一瞬むき出しにしてしまった。

慌ててリストバンドを戻し、転んだ分の遅れを何とか取り戻した。

「長距離5000m 3位 紀乃花きのはな高校 杜野 遊里。」

賞状を片手に、仲間の集まる場所へと向かう。
気分は、晴れないまま。

「やっばすげえよお前。大事なところで転んでも3位まで巻き返すんだもんな。」

「…本当は1位を取りたかったです。」

…腕の事には触れないでくれ。そればかりを願い続けた。

「じゃあ、今日はゆっくり休めよ。お疲れさん。」

この地点で事態は收拾したと、信じたかった。

帰宅。風呂に入って、家族と夕飯。

「遊、今日はお疲れ。転んだところからの3位なんてすごいじゃない!」

目の前には、母さんの自慢の手料理。

「母さん、テレビ中継見てたろ?俺、どんな感じに映ってた?」

「そりゃもう、転んだところが拡大で映ったわよ!顔が映らなくて良かったわね。」

俺は安堵のため息をついた。

良かった。幸いカメラは背中側を映していたらしい。

「じいちゃんさま。今日も美味しかった。」

さてと、今日もメールチェックと。

自室でパソコンを立ち上げ、iGoogleを開く。

マウスを動かす手が、ぴたりと止まる。

「何だこれ……」

俺は自分の目を疑った。

.....

Google 急上昇ワード

1・血濡れ貞子

ウェブ検索結果

【画像あり】血濡れ貞子の呪いにかかったイケメン高校生【呪】

血濡れ貞子とは？

2・杜野遊里

ウェブ検索結果

高校生陸上競技 県大会5000m男子3位・杜野選手の腕に、
キモい模様があると話題に【検証画像付き】

リストバンド風雲児がマジで人間じゃなかった件
wwwwwwwwwワロタ

- - - - -
- - - - -
- - - - -

なんだよ、急上昇ワードの1位と2位が俺と弥風ってどっぴいことと
だよ。

なんで俺の事なのに、弥風まで巻き込まれてるんだよ。

なんでなんでなんでなんで。

恐る恐る、リンクからページを開く。全部が某大型掲示板のものだ。

実は、テレビ中継でほんの数秒だが転んだ瞬間の腕が映り込んでいたらしい。

この某大型掲示板の奴らは、その一瞬も見逃してはくれなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

1 : 名無しくん 20 x x / 09 / 08 18 : 32

こいつの腕どうなってんのwwwwww【検証画像・動画あり】

59 : 名無しくん 20 x x / 09 / 08 18 : 33

<<1
うわっ、これはガチでキモいwwwwww

104 : 名無しくん 20 x x / 09 / 08 18 : 33

<<1
刺青じゃねーのこれ

150 : 名無しくん 20 x x / 09 / 08 18 : 34

<<104

こんなセンス悪い刺青なんかねえよ。

<<1の動画を見る。よく見ると腕の模様が動いてるだろ

192:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::35

リストバンド風雲児www

そりゃリストバンド取れないわなwwwワロタwww

225:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::36

<<150

マジだ。。。なんだこれ呪いか？

330:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::39

<<225

俺そいつと同じクラスだけど、もしかして血濡れ貞子の仕業かもな

342:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::40

<<330

日本語でおk

391:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::40

<<330

k w s k

420:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::41

<<330

リアル貞子???

573:名無しくん 20x x / 09 / 08 18::41

<<330だが

他のクラスに、地毛が血みたいな色の女子がいてさ

そいつが血濡れ貞子って言われてただけだけど、俺らのクラスは他のクラスと離れてるから滅多に会えない奴なんだ。

1週間くらい前、突然俺らの学科の校舎に血濡れ貞子が現れて教室中大パニックになった

606：名無しくん 20xx/09/08 18:43

実際髪が赤い女ってただけだろ？そこらじゅうで髪を赤に染めてる奴いるだろw

744：名無しくん 20xx/09/08 18:44

<<606

俺も同じ学校だが、実際に見てみないとわからない。あの色はガチ。親いなくて一人暮らしらしい。

家政科なんだけど、一人でいつも黙々と作業してて、

その姿が人を殺した後の貞子にしか見えなくて気持ち悪いwww
マジで幽霊なんじゃねーのwww

血濡れ貞子の画像1枚持つてるから晒すわw

勿論編集はしてないお

ttp://xxxxxxxxxxxx.jpg

750：名無しくん 20xx/09/08 18:46

<<744

怖www

759：名無しくん 20xx/09/08 18:48

<<744

俺らの名が知れ渡ってしまった。

この腕は弥凧はまったく無関係だ。一番の被害者は弥凧だ。

その前に…明日、学校に行ったら俺はどうなってしまうのだろうか。

ご丁寧に俺のクラスの奴から情報漏洩されてるし、話題が広がるのは確かだ。

弥凧…これを知ったら泣いてしまっただろうな。

某所にて。

「んっふっふ」世界の反乱因子、見つけたっ！」

暗闇の中で、パソコンで何やら情報を見ている謎の少女。

パソコン画面には、例の大型掲示板の文字がずらり。

「遊里くんかあ……なかなかイケメン！この子が化身になるなんて勿体ないわ

いや、もしかしたら化身もイケメンなのかも……

あげは、いつその事遊里くんのお嫁さんになりたいーいーいー！」

「あげは」と名乗る少女の後ろには、ソファアに座り、今時では珍しい煙管を吸う青年。

「おい、あげは。反乱因子は真っ先に排除すべきだろう。そいつは危険なんだ。」

「リーダー、つれない！……あ、そうだー！」

あげはが、手元のペンをくるくる回しながら席を立つ。

「化身になる前に、この遊里くんを手なずけてこっちのものにする

持つべきものは何？

翌日。

「はぁ………」

学校に、着いてしまった。

ここまで学校に行きたくないと思ったのは生まれて初めてだ。

みんなにどう思われてるんだろう？

どんな事を言われるんだろう？

怖い、怖い、こわい……

ふと、弥風の悲しげな表情が頭をよぎる。

弥風は、ずっとこんな気持ちなのかな。

ガラっ、と力なく教室の扉を開く。

どうしよう…前を向けない。

「おっす、遊里!!!」

「!」

いつもの友人に、後ろから肩を叩かれる。

良かった、こいつはいつも通りだ……、

「さあてと、実証開始!」

「!?!?」

肩から左腕に沿っていく友人の手。

まさか、と思つた時にはもう遅かった。

今までの俺の相棒のリストバンドは、無情にも音ひとつなく落ちていく。

友人に取られる俺の腕。

「ほら見ろよ!! ちゃんねるの事は本物だったぜ!!」

教室中の視線が、俺に向けられる。

いや違う、俺の『左腕』に向けられた視線だ。

「うわっ、すげえ」

「血濡れ貞子の呪いじゃん!」

「どっつなってるのこれ。」

「人間じゃねえだろお前」

目の前で起こっている事なのに、まるで遠くにいるような錯覚が起きている。

もう、こいつらと心が離れてしまったということなんだ。

駄目だ、泣きそう……

この感覚は、あの時に似ている。

『やーい！なきむしユウリちゃん！！』

『カナタくんにきすされたんでしょー？』

『おとこのごとうしの「きす」はだめなんだって、おかあさんがいつてたよー！』

4歳の頃、幼稚園で男とキスしてしまった、トラウマが鮮明に蘇る。

そうだ、

俺はファーストキスも勿論嫌だった。

でも、それよりトラウマになってしまったのは、

「周りに傷つけられることだったんだ。

溢れに耐えきれなかった涙が、俺の頬を伝う。

「あれ、こいつ泣いてるし。」

「うわ、エロっ！顔だけ見ると本当に女みてえ。」

「お前まさか遊里に手え出すつもり!？」

「んなわけねえじゃん！俺にはミカちゃんがいるし！こんな奴抱いて呪いがうつったらどうすんだよ！」

喉が、息が、心が、苦しい。

4歳の自分と、姿が重なる。

もういやだよ、こわいよ……………

だれか、たすけて……………

俺は、強くなったつもりでいた。

でも…俺は昔から何も変わっちゃいないという事を思い知らされる。

…バンっ！！

教室のドアを殴り、救世主はやってきた。

「よお、お前ら！！話題の少年はどこだっ」

「…駒木川先輩！！」

まばゆい光が、見えた。

周りの奴らが、ひそひそと話す。

「うわっ、駒木川先輩じゃねえか…」

「早く遊里を引き渡して逃げようぜ！」

傍から見たら人身売買にも見えるが、俺はそうしてくれと心の中で切に願った。

「ほら、駒木川先輩！！こいつです！！！」

「おっ、こいつが噂の奴か！ちよいと連れてくぜ！」

恒哉先輩に、勢いよく腕を引かれる。

リストバンドは、教室の床に置いてきたまま。

目的地に向かう途中、人通りが少なくなってきた頃。

ちらつと俺の顔を伺って、恒哉先輩は小さな声でつぶやいた。

「…………早く助けてやれなくて、ごめんな。」

その声は、普段の恒哉先輩からは想像も出来ない、今にも消えそうな弱々しい声だった。

キンコンカンコーン…

授業開始のチャイムが鳴った頃、俺と恒哉先輩は屋上にいた。

「恒哉先輩…知ってるんですよ。これの事。」

今やリストバンドなど必要無くなってしまった左腕。

見るだけでも吐きそうな、赤と紫の動き回る模様。

「勿論だ。散々ちゃんねるに書かれてたな。」

俺の心の声が、口に出る。

「でも俺、自分自身よりも……この事態に巻き込んでしまった、弥
凧に何と言えればいいか……」

恒哉が目をくりんと丸くした。

「『血濡れ貞子』だなんて、学校の中で言われるだけでも辛いのに…

全国で有名になって、しかも写真で顔までバレて…

俺は…弥凧なら何でも話せるって、仲良くなりたかって思ったのに…

俺、なんて酷い事してしまったんだって……」

「まったく、お前つてやつは!!」

笑顔の恒哉先輩の手が、俺の頭でわしゃわしゃと動き回る。

でもそれは、作り笑顔。すぐに恒哉先輩の笑顔は消えた。

「辛いよな、本当に辛いよな。」

俺も、暴力事件を起こした時……、」

ガラッ、ガシャン!!!

「「!!!?」」

恒哉先輩の話の途中で、事件発生。

「恒哉先輩、この音は……、」

「間違いねえ、こここの下の階は家政科の教室があるんだ。」

「家政科……!!」

家政科は、弥凧がいる学科だ。
俺たちは屋上から下の階の様子を伺う。

窓が一つ不自然に開いている。

「早く死んでよ！疫病神！！！！」

「目の前から消えて！」

小さな窓から酷過ぎる言葉と、複数人の手で鷲掴みにされた、紅髪が飛び出した。

「弥凧っ！！！！」

弥凧が危ない。

「おい、遊里！」

恒哉先輩の制止は俺の脳まで到達しなかった。

早く助けなきゃ、助けなきゃ……！！

俺の身体は、本能のままに動いていた。

穢れの取り合い、混ざり合い

「はっ、はあっ……」

弥風を助ける、その一心だけで動く身体。

屋上から階段を一つ下がった場所には、大きく『家政科校舎』と表示がある。

さっきの奴らの声が聞こえる。

『きゃっ、何よあんた！気持ち悪いのよ！…！』

『幽霊なんだから、素直に成仏しろよ！』

場所は、女子トイレ。

男も先生も入ってこない、女子の絶好のいじめスポットってやつだ。

残念ながら、俺には今そんな事考える余裕などない。

ダンッ！！

力任せに女子トイレの扉を開いた。

一瞬場が静まり返る。

「んっ…、」

聞き覚えのある声。

5人の女に布で手足を縛られ、口も塞がれ、助けを求める術を失っていた弥風がいた。

制服はボロボロに汚れ、身体には人為的な切り傷に、抵抗の証の擦り傷が痛々しく残っている。

「え、やだ…男！？ここ女子トイレよ、何考えてるの！？」

「あれ、もしかして杜野じゃない！？ほら、だってこの腕…」

もはや悪い意味で有名になってしまった俺の腕。

こっちの気も知らないで、面白がりやがって。

「…てめえら、覚悟しろよ。」

恐らく、今までの人生の中で一番低い声。

お前らは弥風を人間じゃないって侮辱して、やってはいけない事を正当化して。

「な、なによ!! 女の子に手を出したらどうなるかわかってるんでしょ!？」

……そう言っつて、世間に守ってもらえると思っつな。

人間じゃないのは、お前らの方だ。

勢いよく振り上げた拳が、5人の女目掛けて飛んでいく。

「きゃあああああああっ!」

「おやおやー? 女子トイレの扉が開けっぱなしってどういう事かな
ー?」

「…?」

女を殴りにかかった手を止め、後ろを振り向くと、またあの輝く金髪が見えた。

「あ、恒哉先輩……」

「……んー？何で遊里がこんなところにいるんだー？もしかしてなにかあったのかなー？」

わざとらしい演技で、じろじろと俺らを見渡す恒哉先輩。
5人の女と弥風の様子を見て、俺の顔を覗き込む。

そして恒哉先輩は、ニツと笑った。

「俺に任せときな。さてと……」

5人の女に振り返った恒哉先輩。

「なによ……何なのよ……」

俺に続いて恒哉先輩と、問題児の続出に震える5人の女。

その傍らでは、身体を自由を奪われた弥風が力なく倒れている。
お前ら5人と弥風、どっちが怖かったと思ってるんだ、こいつらは。

奴らなら間違いなく、『自分』と答えるんだろっけど。

「この俺様、駒木川 恒哉は再び暴力事件を起こす事をここに宣言
いたしまーすつと。」

お前ら5人、一旦面貸せよ。」

「!?!?!」

まさか、恒哉先輩…

パン！パン！パン！パン！パン！

響き渡ったのは鈍い殴打音…ではなく、

そこから良く見る、『ただの』平手打ちだった。

その顔は、まるで親が子どもを叱る時の平手打ちと、よく似ていた。

「いやあああつ、つめんなさい！！もうしませんから！！…！」

恒哉先輩に叩かれた頬をおさえた、5人の女は去って行った。

「弥風、弥風っ！」

彼女は気を失っていた。余程酷い事をされたのだろう。もっと早く気づいていればこんな事には…

手足と口の拘束を解いて、彼女を背負って恒哉先輩と一緒に屋上へ。

弥風の身体、冷たい…

屋上。近くに捨ててあった穴のあいた体育マットを広げ、弥風を寝かせる。

あまりにも痛々しい姿。

ごめんな、俺のせいで…

「さてと、強制退学させられる前にお前には話さなきゃいけないな。」

「…！退学って…、ピンタでも、ちゃんとした理由があるのに、そ

れでも駄目なんですか？」

今日、俺らを2度も救ってくれた恒哉先輩。

「恒哉先輩、暴力事件を起こすって言いましたよね？」

あれの何処が暴力なんですか？

少なくとも俺には、暴力には見えませんでした。」

表情をゆがめる恒哉先輩。

「…弥凧ちゃんを助けに行く前に言いかけたけどさ、

2年前の暴力事件の時、俺もちゃんねるで叩かれたよ。家族もみんないなくなつた。

俺はただ、いじめにあっていた妹を守りたかつただけなんだ。」

「！」

遂に明かされる、恒哉先輩の過去。

俺が弥凧を助けたかつた気持ちと、きつと同じなのかもしれない。

「あいつ…毎日ポロポロになって帰ってきてさ。でも妹は「今日も転んで怪我しちゃった」って笑顔で言い張るんだ。」

お気に入りだったアクセサリーも無くなってて、何かあったんだな、ってすぐ妹の嘘に気付いたさ。」

俺の家は親父の仕事の成功でそれなりに裕福でさ、色々と豪華だったし金もあった訳。」

事件の日、学校の創立記念日で休みの日に小遣い貰ってゲーセンに行こうとしたら、学校帰りの妹が同級生っぽい女集団に、リンチされてたんだ。」

『この役立たず。』『金だけ残して死ぬ』ってさ。奴らは妹を金の塊にしか見てなかった。怒りが心の底から湧き出たよ。」

『ぶざけるな』って、俺は力任せで女集団をビンタで止めたよ。」

『セイカがどんなに辛い思いしてるか、わかってんのか!!!?』ってさ。」

「『セイカ』って…妹さんですか?」

「そ、こいつ。」

恒哉先輩は、携帯を取り出した。

電池が入っている裏蓋の見えないところに、幸せな家族の写真があった。

体格ががっしりした父親に、その父親を支える凛とした姿の母親。そして、前にはお互いに仲良く肩を組んだ黒髪の兄妹。

微笑ましい、家族の姿だった。

「あれ、この男の子は…」

「1年の頃の俺。今はこう見えても、2年前までは真面目っ子だったんだぜ。」

「と言う事は、隣にるのがセイカさんですか？」

「そのとおり。『星』に『華』って書いて星華^{せいか}。1つしか変わらないから、遊里と弥凧ちゃんと同じ年。」

「…星華が、まだ生きてたらの話だけどな。」

「え…？」

目の前の写真の幸せな家族が崩れていく。その事を俺は悟った。

「あいつは、15歳で時が止まっちゃった。」

「……じゃあ、星華さんは……」

恒哉先輩は裏蓋を元に戻して、携帯を力強く握った。

「死んだ。自殺さ。」

「……！」

「話を聞けば、女集団が俺に殴られたって警察に言ったらしいのよ。ある事も、無い事も口から出まかせに言われて、警察は全部それを鵜呑みにしやがった。」

俺の意見なんか、これっぽっちも聞いちゃくれない。

『少年は反省する様子はなく、怒り狂っている。』なんて情報を流されたよ。

案の定ニュースにもなっぺさ。ちゃんねるの奴らに住所も、親父の仕事場も、家族の情報まで晒された。

今のお前らみたいに、星華も酷い叩かれ様でさ。

きつと、星華はそれを苦に、自殺してしまったんだと思う。

だから、俺は大切な家族を守るどころか、結果的にみんな殺してしまっただけだ。あとで聞けば、被害者の家族に俺の家族の金がむしり取られてたらしいんだ。

それで、耐えかねた親父とおふくろも、つい2カ月前に死んだ。」

「『耐えかねた』って…それも、もしかして…」

「星華と同じ、自殺。俺が学校に行ってる間にだよ。」

俺は、家族の命を奪ってしまった。最低な男だ。

それなのに、当事者の俺だけ生き残ってる。変な話だろ？」

「そんな……、」

どうして…どうして……

どうして、恒哉先輩は幸せな家族が大好きだったはずだ。

でも、恒哉先輩は涙一つ流さない。

恒哉先輩は孤独を味わっているはずだ。それなのに、いつも笑っている。

なんで、どうして、どうして…

なんで、他人の俺が泣いてるんだよ。

「馬鹿…なんで遊里が泣くんだよ。」

「本当、意味が…解らない…です。…自分でも。」

「…私達は結局、世間に殺されにかかっているようなものだ。」

「…弥風!?!」

弥風が目覚めた。俺のせいだ。謝らなきゃ。

「弥風…本当に、俺のせいで…?!」

駄目だ、涙ばかりが出て、重要な言葉が出ない。

「お前のせいじゃない。私は大丈夫だ。」

「…これの、何処が、だよ……」

どう見てもボロボロじゃないか。制服には穴開いてるし、ブラウスには血が滲んでるし。

「こんなの、いつもの事だ。それに、駒木川先輩……」

「…ん？弥風ちゃんが俺に話しかけるなんて初めてじゃない？」

「申し訳ない。勝手ながら、先程の話は全部聞いた。」

「まじかよ…弥風ちゃんずっと意識あつたってわけ？」

恥ずかしげに顔を伏せる恒哉先輩。

顔、真っ赤ですよ。

「でさ、2人ともこれからどーすんの？」

「そうですね…って、恒哉先輩こそどうするんですか…!」

「あ、俺？」

恒哉先輩はニヤツと悪戯の笑みを浮かべた。

「とりあえず、退学するまでお前たちにくつつこつかなー！あっはっはー！」

「……………」

おいおいおい。開いた口が塞がらないぞ。

「ん？お前らそんなに俺が嫌か？」

「いや、問題ないですし、むしろ仲良くしたいですけど。でも弥風が……………」

「…私は、先程の話で駒木川先輩に興味があった。」

「ほらこの通り……………って、ええええ！！？」

意外だ。意外すぎる。

何だよ、興味が湧いたって。

「んーん、弥風ちゃんがOKサイン出してくれたし、決まりだなー！」

今日は1日、授業さぼっちまおうぜー！！」

…なんか変な感じになったけど、でも、何故か嫌じゃない。

心通じ合っ仲って、こっいつ事なのかな。

「…ぶっ、」

「ん？？」

「…どうした。」

「今、弥風…笑った？」

「…！ 気のせいだ。」

「いんや、弥風ちゃん、俺には笑ったってわかるぜー！」

「だから、気のせいだと…！」

ちよっただけ、弥風が心を開いた瞬間だった。

職員室。

そこには、恒哉に顔を叩かれた5人の女がいた。

「先生！私達、あの駒木川さんに殴られたんです！！これ、見てください！」

女5人は、殴られた事を猛アピール。

そして、5人には足にも傷が。

足の傷は、弥凧が抵抗した跡だ。

「私達、足まで怪我したんです！」

「この犯人は、同じ家政科の五十嵐さんと、」

「……突然女子トイレに忍び込んできた、体育科の杜野さんの3人です！！」

話を聞いていた先生は、ため息をついた。

「そうか、駒木川に続いて、五十嵐と杜野までか。ネットに書いてある事は本当だというのか…」

「そうですそうです！杜野さん、腕に気持ち悪い模様がありました！あれは本物です！」

「…わかった。あとは生徒指導課に任せておけ。」

「はい、わかりました！」

「大杉先生^{おおすぎ}、着任早々申し訳ありませんが、お仕事が入りました。」

「…構いませんよ。」

『大杉』と言う名の先生のデスクには、今時には珍しい煙管が置いてある。相当な年代物だ。

「生徒指導課として、徹底的に3人を指導させていただきます。」

大杉の光る眼鏡の奥は、まるで獲物を狙っているかのような目つきだった。

5人の女は、満足げに職員室を出る。

「これで、3人も終わりねー。」

「後で ちゃんねるに書きこんでおくよ!」

「おーけー!」

「ねーねー、君たちー!」

初めて聞く声。

5人の目の前には、ツイントールで栗色の髪の見慣れない女子生徒がいた。

「ちょっとあなた、誰なの?」

女子生徒は、口角を綺麗に上げた。

「あたし、今日から体育科所属になった、小桐^{おぎり} あげは!

掲示板で遊里くと血濡れ貞子ちゃんを知って、転校してきたの!

学科は違うけど、お友達になりましたよ!」

遊里くんは私のものよ。

待っててね、遊里くん

目覚めと暴走。

例の左腕騒動から、1日。

学校をさぼったら家族に申し訳ないし（恒哉先輩の話聞いたから尚更）、部活の事だつてある。

教室では一人になつても、弥風と恒哉先輩がいる。大丈夫、ひとりじゃない。

そつ言い聞かせて、教室に入る。

「あつ、遊里が来たぜ、あげはちゃん。」

「え、ほんとー！？やったー！」

教室には、見慣れないツインテールの派手な女子が一人。

誰だ、こいつ。

「君が遊里くんね？」

「…あ、そうだけど……」

「あたし、遊里くんが来るのを待ってたのよ！」

テンションが高い女。

少なくとも、俺はこういうタイプはあまり好きじゃない。

過去に、こういう女にストーカーされる事が殆どだったから。

こいつもストーカー目的だったのか？

「ん、遊里くんやっぱり写真で見るとよりイケメンねー。

可愛い男の子って感じ!」

「っ、それを言うな!」

元々機嫌が悪いのに加えて追い打ちをかけられて、冷静を気取っていたのに苛々が声に出してしまった。

可愛いとか女っぽいって言われるのは、やはり男として不快だ。何度言われても慣れない。

「ねえねえ、ちょっと一緒に遊びに行こうよー!」

何だよこの女。訳がわからない。

手を取られて、そのまま俺は連れ去られてしまった。

…行き先は、屋上。

「っーいたっ
」

女はまだ俺の手を離してくれない。

それどころか、恋人のように手を振り回してくる。

耐えきれなかった俺は、女の手を払った。

「…何なんだよお前。何しに来たんだよ。」

「うーん、簡単に言えば、こういう事かな」

目の前が突然暗くなる。

唇に当たる柔らかい感触。これは…、

「ん、んっ……、」

やめろ、やめてくれ！

声に出したくても、身体が動かない。力が全く入らない。

抵抗したいのに、何故か出来ない。

なんか、全ての力が奪い取られて行くような感覚…

やっと、女の唇が離れた。

「…ぷはっ！はっ、はっ………」

情けなくも、腰が砕けてしまったようだ。
立つ事が出来ず、その場に座りこむ。

「うふふ、もしかしてキスは初めて？」

気味悪く笑う女。

「でもね、あたしのキスはただのキスじゃないのよ」

顎をしなやかな手つきで撫でまわしてくる。

駄目だ、唯一抵抗できる両手は立てない身体を支えるので精一杯。

「これから、君はあたしのものになるのよ」

「……………！！！！」

もう一度、互いの唇がくつききそうになった、その時、

俺らのものではない影が後ろから差し込んだ。

もう誰かはわかりきっている。

「よお、そいつにはもう彼女がいるんだぜ？知ってた？」

…やっぱり恒哉先輩だ。ここは昨日もいた屋上だから、彼ならいる
と思ってた。

しかし、ありもしない嘘をつきやがって。

「むう、邪魔が入っちゃったー！あと少しだったのにー！」

ぶー、と頬を膨らませる女。

「仕方ないわ、でも今度は絶対に遊里くんをもらっちゃうからね！彼女が
いようと関係ないわ！」

「……………」

女の口から、衝撃の言葉が。

「その腕の様子は、一生消えないわよ。」

君はあたしの旦那様になる義務があるの。

遊里くんはね、世界を滅ぼす危険な人間。

それを止められるのは、あたしだけ。

それは何があっても、変えられない運命なのよ。」

何を、何を言ってるんだ？

こいつは、俺の腕の様子について何か知っているといるというのか？

もう何がなんだかわからない。

ここ2日で、もう混乱してばかりだ。

「まあ、良いわ！仕込みはもう出来たんだもの！

あたしは、小桐 あげは！よろしくね、マイダーリン

次の授業で待ってるね！」

「…、」

屋上に残された俺と恒哉先輩。

「なんか訳わかんねえ奴だな、あげはって奴は。」

「……………」

「遊里？」

声が、出ない。

手に残っていた力も、徐々に抜けていく。

目蓋も俺の意志に反して、どんどん落ちて…………

「おい、遊里！遊里！！」

恒哉先輩の声が、遠のいていく……………、

『まあ、良いわ！仕込みはもう出来たんだもの！』

あげはこのこの言葉の意味を、俺は後に知る事になる。

再び目を開くと、そこは暗闇の世界。

世界の中に、自分の姿が映る。

俺は一糸纏わぬ姿で、暗闇に立っていた。

……そして、身体全体、そして顔にまで、

左腕にだけあった筈の、赤と紫の奇妙な模様が広がっている。

「……………ああああああああっ！！！！！」

気持ち悪い気持ち悪いきもちわるいキモチワルイ。

自分を隠すものなんてない。

上を向いても下を向いても左を向いても右を向いても、

何処に逃げても、自分の醜い姿が映っている。

誰もいない世界なのに。『自分』から、逃げられない。

『オマエハ、セカイヲホロボスバケモノダ。』

頭の中に響いてくる声。

……これは、俺の声だ。

『マエヲ、ミロ。』

声に従って、前を向くと、

俺と同じ赤と紫の模様の、足が変な方向に折れて、

不自然なボロボロの翼を付けた、見る目も当てられない醜い獣がいた。

『メヲソラスナ。コレハオレデアリ、オマエダ。』

肩を掴まれ、目の前でさらさらと消えていく獣。

『ジブンノチカラニ、クルシメ。』

獣は完全に消えた、かと思ったその時、

さらさらと舞う獣の粒子が、全て自分の体内へと入り込んできた。

「…ぐっ…！」

胸が、苦しい。恐らく心臓だ。

そして、心臓から全身にかけて鋭い痛みが襲う。

「うああああああああああっ…！…！」

怖い、痛い、苦しい…！

死にたくない…！

職員室前廊下。

「リーダー!!」

ご機嫌上々のあげは。彼女が呼びとめたのは、

「…ここでリーダーと呼ぶのはよせ。」

「はいはい、大杉せんせい。」

生徒指導課に新しく着任した、大杉だ。

「あたしね、やったわ!遊里君の細菌手に入れちゃった」

大杉はため息をついた。

「お前の事だ、大体何をやったか予想はついている。」

「んっふっふ」

「恐らく彼は、お前が彼自身の中に潜む化身を呼び起こした事によって暴走を起こす。せめて場をわきまえて欲しかったものだな、あげは。」

折角私が生徒指導のところで説得しようとしたところを……」

「むー。だつてー！」

「しかも、中途半端に力を呼び起こす事だけして、契りは交わさなかった。これは危険因子を世に振りまいてしまったようなものだ。」

大杉の厳しい言葉を聴く事無く、「きやはっ」とまるで子供のようなテンションで大杉に飛びつくあげは。

「だーいじょうぶ！遊里くんのをもらったあたし以外に、暴走した遊里くんを止められる人なんているわけないじゃない！」

暴走したところであたしが止めちゃえば、遊里くんはこっちに来るし……うーん、完璧」

「はあ……」

大杉は嫌な予感を胸に抱いていた。

理論上では、あげはが暴走した杜野 遊里を止めれば事態は収拾。

そして、杜野はこっちへ来ざるを得なくなる。

…しかし、理論ではどうにもならない事もある。

その事を大杉は良く知っていた。

』……ぐぐぐおおおおお……!』

「『!』」

突如校舎内に響く声。

校舎の人間はみな驚き、戸惑っている。

…遂に始まった。

恐らく、彼・杜野 遊里が自分の内に潜む化身とぶつかり合って暴走したのだろう。

「あたし、行ってくるねー」

あげはは、スキップしながら屋上へと向かった。

「があああああああああああつ！！！！！！！」

「遊里、しっかりしろ！！遊里！！」

屋上には、恒哉と遊里の姿が。

遊里の様子が何やらおかしい。

気を失って倒れたかと思いきや、突然白目をむいて、獣のような雄たけびと共に暴れ出して。

暴れる遊里を必死に止める恒哉の顔には、複数の青痣が。

「はなせ、はなしやがれ……！おれは、じゆうになる！」

「こんな状態のお前を放りだせる訳無いだろ！！俺は絶対に、お前を止める！」

「まだ、わからないのか……！」

鋭い力で、恒哉に容赦ない拳をぶつける遊里。

「っ！」

その場で転んだ恒哉。

「ゲフウウウウツ、」

遊里の左腕の奇妙な模様が、全身に広がり始めている。

恒哉を踏み越えて、何処かに歩いていく遊里の姿はまるでゾンビのよう。

……もう、優しい遊里の面影は完全に消えている。

恒哉は、ただその姿を呆然と見る事しか出来ない。

限界を感じつつも自分に鞭を打って、身体を起こす恒哉。

「おい待てよ、まだ俺は終わっちゃいねえ……！」

「……………」

自分がやっている事は、時間稼ぎでしかない。

自分が倒れたら、他に遊里を助ける人なんているのか？

遊里は、もう助からないのか…？

「…めざわりだ、しね。」

遊里っ……………！

バンっ！！

「…！！？」

屋上の扉が開く。

その先にいたのは、この事態の元凶の小桐 あげは……………ではなく、

「…私が相手だ。遊里。」

覚悟を宿した強い瞳の、五十嵐 弥凧がそこにいた。

闇と光の絆

「がふうううつ、」

もはや理性を持たない獣と化してしまった遊里。

左腕の赤と紫の模様が、左半身全体に浸食している。

「遊里…、」

瞳が見えない白い目の遊里に、果たして弥風の様子は映っているのだろうか。

「頼む弥風ちゃん、逃げてくれ!!」

言う事を聞いてくれない恒哉の体。唯一自由がきく声をフルに使い、思いきり叫ぶ。

昨日の一件で、弥風は体中とところどころ怪我をしている。体調も万全ではないはずだ。

そんな中で、こいつに手を出されたら…!!

「…駒木川先輩、残念ながらその願いは聞けない。」

「弥風ちゃん…そいつはもう、遊里じゃない!!」

弥凧は遊里に向かって、抵抗の姿勢一つ見せず、親が子供の帰りを待つかの様に両手を広げた。

「…『常に痛い』と言っていたその模様が広がって、苦しいんだろ
う、遊里。」

「こっちに…来い。」

「ぐはあああああああっ！」

遊里は、闇雲に弥凧に突進していく。

ドンッ…

「っ…！」

2人がぶつかり合う音。

弥凧は猛スピードで突進してきた遊里を、両腕で受け止めた。

遊里と弥凧は、衝撃で共に地面に転がった。

「弥凧ちゃん！！大丈夫か！？」

やはり昨日のダメージが残っているのか、弥凧はその場から動かな

い。

まずい、ここで追い打ちをかけられたら…！

体が動かないとはいえ、ここでただ見ている訳には、いかない。

「弥凧ちゃ……………、あ……」

ふらふらの足取りで2人に近づく恒哉。

「…これは……………」

恒哉は自分の間違いに気づく。

違う、弥凧ちゃんは動けないんじゃない。

互いに倒れたまま…強く、遊里を両腕で抱きしめてる。

あれほど自分に抵抗してきた遊里が、だんだん大人しくなってきた。

全身に広がりを見せていた模様も、徐々に治まってきている。

「うつ……………はあ、はあ……………」

全身に汗を流し、Yシャツの心臓あたりを両手でくしゃっと握って苦しそうに悶える遊里。

「…まだ、まだ苦しいのか、遊里。」

弥風は、優しい手つきで、遊里の背中をさすっている。

自分にも、出来る事はあるはず。あるはずなんだ。

事態が発生する前の、あの『あげは』って奴が言った言葉が頭をよぎる。

『むう、邪魔が入っちゃったー！』

…あと少しだったのにー！』

…『あと少し』？

つまり、あの女は何かを中途半端にしていたんじゃないか？

あげはって奴が、俺が姿を現す前にやるうとしていた行為。それは、

「弥風ちゃん！」

「！」

「嫌かもしれないけど……遊里の為だと思って、頼む！」

キス…、をすれば、きっと治るかもしれない！」

「……………」

弥風は、無言でゆっくりと遊里に顔を近づける。

……………そして、

「遊里、こっちを向け。」

「はあ、はあ……………！、んっ、」

2人の唇が、重なった。

暗闇の中、一人で痛み悶える俺。

誰もいない闇の中で、俺はただ涙を零し、暴れた。

でも苦しさは晴れなくて、体中が言う事をきかなくなってきた。

全身の様子が、疼いている。

『セカイヲ、コワセ』と。

そんなこと、絶対に、絶対に出来ない！！

…ふわっ、

突然、柔らかい感触が、俺を包んだ。

なんだろう？

全身の痛みが消えて、自由がきくようになった身体。

目の前に小さな、小さな光が見える。俺は、光に手を伸ばした。

……あたたかいひかり。

もっと、もっと……

俺は、その光を手を取った。

『ユウリ、オマエハ、オソロシイチカラヲモッタ、バケモノダ。』

「……！」

俺の声。先程俺を乗っ取ったあの獣だろうか。

『デモソレハ、セカイヲカエル、チカラニモナル。』

「……世界を変える、力……？」

『ソノヒカリハ、オレヲ、ソシテオマエヲカエル。』

俺は、この暗闇の世界の、小さな光を守りたい。

手のひらの光を、目の前にかざす。

俺を闇から救ってくれた君を、守ってみせる。

全身の赤と紫の奇妙な模様が激しく動き回り、
模様が変化を起こし、黄金色に眩しく輝いた。

「…!？」

弥凧がキスをした瞬間、遊里の身体が眩しく光り出した。

遊里の目蓋が、ゆっくりと開く。

「…契約、完了。」

遊里の姿は、メキメキと音を立てて形を変えていく。

「…!？」

弥凧も驚いたのか、腰を抜かしてただ遊里の瞳一点のみを見つめている。

黄金色の美しいフォルム、

しなやかな羽、

勇ましい瞳。

その姿は、まるで伝説に聞く

フェニックス
不死鳥のよう。

「 ……守ってみせる。絶対に。」

「 ……遊里、これは……、」

フェニックスの姿となった遊里は、美しい羽を弥凧の頬にかざす。

「 ありがとう、弥凧。闇から俺を救いだしてくれて。」

「 ……? 」

何を言っているかこちらからは解らないが、微笑むフェニックス。

…この優しい表情。

間違いない、これは遊里だ。

「恒哉先輩も、ありがとうございます。」

声、聞こえてきました。さっきは何も出来なくて、傷つけてすみませ
んでした。」

「……………」

恒哉はあり得ない状況に混乱し、言葉を失くしていた。

羽が、眩しく輝き出す。

羽から降り注ぐ小さな光の粒が、弥風と恒哉を包みこんだ。

「…!?!?」

恒哉が、自分の身体の変化に真っ先に気付く。

ちゃんと、立てる。

あれだけ痛かった全身も、痛みがやわらいでいる。

もしかして…………

「弥凧ちゃん！そのほつぺたの絆創膏、外してみてください！」

「…え、だが私は、怪我を……」

「いいから！」

恒哉は弥凧の頬の絆創膏に手をかけ、勢いよくはがした。

「……やっぱり、」

昨日あれだけ切りつけられた傷が、完全に癒えている。

頬だけではない。腕や、足にもあった傷も、全て完全に消えて無くなっている。

屋上のドアのガラスに映る、自分の顔。

暴れた遊里につけられた青痣も、綺麗に無くなっていた。

すごい…これは、まさに『奇跡』。

「弥凧。俺は、君を守る。」

弥凧は、静かに目を閉じ、再びフェニックスに向き直る。

「……なら……私は、お前を守る。」

「ははっ、」

心が温まる、この光景。

こんなに心が温くなったのは久し振りだよ。親父、おふくろ、星華。

「ふんふーん」

鼻歌を歌いながら、スキップで屋上への階段を上るあげは。

ドアに手をかけた瞬間、突然の眩しさに目が眩む。

「……きゃん！なにになー！？」

「！！！！！！」

なんで、どうしてこうなったの！！？

こっちの作戦は完璧だったのに！

遊里くんの化身のパートナーは…あたしではなく、血濡れ貞子ちゃん。

…許さない、絶対に痛い目にあわせてやる。

怒りに震え、あげはは屋上を後にした。

赤と紫の左腕の模様は、フェニックスの姿と同じ、美しい黄金色に姿を変えていた。

黄金色の模様の中の、金色の斑点がなにやら規則的に動いている。

斑点が描いているものは、いくつかの文字だった。

M、U、S、T、L、I、V、E。

『ゼツタイニ、イキロ。』

それは、遊里の内に潜むフェニックスからのメッセージであり、
暗闇の世界にいた、醜いあの獣からのメッセージでもあった。

素直になつたら大変だ。

放課後の体育科教室前。

遊里が弥凧と出逢つた場所。

そして今も、2人はそこにいる。

「なあ、弥凧……俺達ってさ、」

「……何もなかったと言っている。」

「……嘘つくなって。」

「……」

俺の左腕は、リストバンドで隠れたまま。

前とは打って変わって綺麗な模様になつても、結局現状は変わらないのだ。

そして、今もこの通り。

弥凧は、相変わらずの仏頂面。

さっき、俺を抱きしめてくれた程の素直さは何処に行ったんだ…

他に状況を知ってる恒哉先輩は、『あとは2人で話つけるよ』なんて楽しそうに言ってる帰ってしまったし。

ましてや俺を酷い目にあわせた、あげはなんて以ての外。きっぱりとあげはの誘いは断ってやった。

「だからさ、俺は…君に救われたんだ。

記憶は、はっきりとしてないけど…

でも、弥風が俺を助けてくれたって、わかるんだよ。」

「……何故、そうなる…」

「何故って……、」

…あの闇の世界から意識を取り戻して、俺は弥風を抱きしめていた。

感触は、俺が迷い込んでいた世界に差し込んできた光そのもの。

弥風のあたたかさを、感じたんだ。

…でも、そんな事を本人の前で堂々と言えるはずが無い。

言ってしまったら俺の顔が恥ずかしさで、もれなく引火する。

それじゃ、本当にカップルじゃないか。

「…………お前は、ただ気を失っていただけだ。

ついでに言えば、私の怪我についても夢だ。私はいじめなど受けていない。この通り無傷。それで良いだろう。」

こいつ、絶対何か隠してる。

「じゃあ、もし夢だったらさ…なんでこの左腕は黄金色になったんだよ。」

気を失ってる俺を見てたなら、知ってるだろ？」

「…………知らないな。お前が自分自身の闘いに勝った。そういう事だろ。」

「……………」

次は俺が黙り込んでしまった。

確かに、あの暗い世界にいたのは、『俺自身』。

でも暗い闇を吹き払って、明るい光を照らしてくれたのは間違いない。弥風。

恒哉先輩の声も、かすかに届いていた。でも恒哉先輩とは違う。感覚でわかる。

恒哉先輩では、振り切れなかった闇だ。

「じゃあさ、何で…」

弥風、そんな泣きそうな顔してんの？」

「！！！！」

俺は素直に疑問に思った事を言っただけだが、どうやら完全に弥風を怒らせてしまったみたいだ。

人前では泣けないもんな、こいつは。

俺みたいに、人前で堂々と泣くような人じゃないし。（自分自身、涙もろいのはかなり気にしている。）

「…ふざけるな！！」

「！？」

これまでにない、弥凧の声の荒げっぷり。

呼吸をフルに使ったせいで、肩が激しく動いている。

これは本気なんだろう…な。

「…お前のせいで最高に気分が悪い。帰らせてもらおう。」

「お、おい！待てよ弥凧！俺が悪いって言っても、理由がわからなきゃ謝りようがないだろ！」

気分を悪くしたなら、せめて理由を教えろよ！」

「………すまない。」

声に落ち着きを取り戻した弥凧。

しかし、その表情はまだ何処か不自然。

「先程、『お前のせいで』気分が悪いって言ったのは、若干は嘘だ。

結局私は、感情をコントロールできない私自身が大嫌いなだけだ。

遊里…お前を見ると、私は自分がわからなくなる。目の前に必要なものがあるのに、何も見えなくなる。」

「弥凧…そんなに自分を責めるなって…、」

…俺は何も持つちゃいねえよ。ただのちっぽけな人間。それだけ。

「…もう私は、あれから人を信じないって、決めてたのに……！」
遂に、頬を伝ったいくつもの弥風の大粒の涙。

…守らなきゃ。

あたたかい光、どうか消えないで。

俺は、無意識に本能で動いていた。

俺の腕に引き寄せられる、弥風の身体。

「過去に何があったかはわからないけど、もう一度、いや、何度でも諦めないで信じてみてくれよ。」

俺は、君を守るパートナーなんだ。いくら自分が傷ついても、守りたいんだ。

だって俺は、最初に会った時から、君の中のあたたかさに惹かれていたんだから。」

「え…、」

瞳を丸く開いて、こちらを伺う弥風。

「不器用な君だけど、俺にとっては大切な人なんだよ。弥風がいなくなったら、俺の光も消えちまう。」

「馬鹿者…が…、」

涙で濡れた頬が、俺の頬にくっつく。

「お前、さっきの黄金色の鳥…、フェニックスだろ。」

「…まあ、間違っちゃいないけど。」

「お前じゃない。遊里の言葉を聴かせてくれ。」

「…俺だって遊里だよ。前向きな考えの方の遊里。」

「違う、私が知ってる遊里は、もっと素直さが欠けてるはずだ。」

…『素直さが欠けてる』って…弥風に言われたくはないんだけど。

「まあね、『あっち』の俺は、とにかくシャイなんだよね。」

さっきだって、心の中で『恥ずかしさで俺の顔が引火する』なんて言ってたぜ。」

「…クスツ、」

あれ？弥風今は絶対確実に笑ったよね？

これで弥風が笑ったのは2回目。

今回はばっちり笑顔も記憶に抑えた。

……良かった、笑ってくれた。嬉しい。

「大丈夫、ついでに言えば、『あっち』の俺はちゃんと君とキスしたことも、フェニックスに変身した時の事も覚えてるよ。」

ただ、本当に素直じゃないってだけ。素直な自分をさらけ出してしまった事が恥ずかしくて、速攻で記憶の引き出しに見えないように素直な自分の気持ちを詰め込んでしまったってだけ。

フラッシュバックがいい例だよ。引き出しの中にも曖昧な記憶が存在するのは事実で、完全に忘れたわけじゃないよ。

………そうだ、忘れようとしてごめん、弥風。

俺は、君のその真っ直ぐな心が、とても好きなんだ。」

遊里の顔はまるで茹であがったかのように真っ赤。まさに、引火状態だ。

彼の気持ちを、やっと知る事が出来た。

「私も、お前のその優しい心が、好きだ。」

私は、お前が私を知る前から、お前の事が好きだった。

毎日、誰もいない放課後に体育科の校舎を通っていた訳は、教室前にある厳重な硬さのガラスケースに入っている、トロフィーと、賞状と、その結果を残した者の写真を見に行く為。

そう、その写真に穢れの無い笑顔で写る、体育科2年・杜野 遊里の存在が、私に生きる勇気を与えてくれたから。

そんな事を遊里に知られたら、私も遊里と同じく、恥ずかしさで顔が引火しそうだ。

遊里の肩の向こうに見える、写真の中の、笑顔の遊里。

そうだ、私は、この笑顔を守らなければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742ba/>

mustLIVE -何があっても、絶対に-

2012年1月15日02時49分発行